駐英大使・重光葵の欧州情勢認識
－帰国時の「大使奏上草稿」を中心として－

キーワード：重光　葵，駐英大使

藤　井　徳　行*・小　泉　憲　和**

（平成12年9月14日受理）

目　次

1．はじめに
2．外務省中枢を歴任
3．駐英大使期の意見書と彼の政策構想
4．帰国旅程と草稿の執筆
5．「大使奏上草稿」の内容
6．むすび

1　はじめに

昭和戦前期を対象とした従来の日本外交史研究は，陸軍と外務省との競合関係に力点が置かれ，外交官固有の外交政策構想の分析等が軽視される傾向にあった。陸軍の政策決定に対する影響力が強まるこの時期について言えば，単に陸軍の対外膨張に反対していたという理由だけで，外務省の対外政策構想が全体として「国際協調主義」であったとの評価がくだされている。はたして「国際協調主義」の一語で括ることが適当であろうか。

かかる疑問をもとに筆者は，昭和戦前期の外務省を代表する外交官のうちで，とくに重光葵を取り上げ，その政策構想の解明と歴史的評価について考察をおこなってきた[1]。

本稿では，これまでの研究成果を踏まえつつ，重光葵の駐英大使時代（昭和13年10月から昭和16年6月）の最終盤にあたる時期を中心に考察してみたい。すなわち，重光が駐英大使の任務を終え，帰国途上の船内で推敲を重ね，書き綴った「大使奏上草稿」を対象として，当時の重光の欧州戦局判断や天皇への上奏内容を明らかにしたい。

さて，筆者が駐英大使期の重光に着目した理由は次の3点からである。第1は重光が当時，外相候補として噂され，彼の政策構想が近い将来，ある程度実現できると考えられる立場にあったという点である。第2は彼の本国宛に送った意見書等が日本国内の重臣層にも回覧され，国内においても有力な支持者を得ていた点である。第3に本国からも武力衝突の続く中国からも遠く離れ，しかも世界情勢を把握するに有利な情報を得やすい英国に在住している重光であってみれば，客観的な意見や進言を述べやすいと考えたからである。

日本の戦前期外交において，かかる重要な位置にいたにもかかわらず，重光葵についての先行研究は管見の及ぶ限り，意外に少ないといえる。酒井哲哉氏[2]は，重光葵・吉田茂の二人の外交官の外交的態度を通して満州事変前後の外務省の対中国政策の変遷を分析している。しかし，重光の外務次官期までを対象としており，その後は触れられていない。田浦雅徳氏[3]は，昭和十年代の外務省革新派のひとりとして重光を位置づけ，白鳥敏夫と対比的に論じている。その中で重光の駐英大使期の外交的態度にも一部言及しているが，それは主として『外務省記録』を基礎史料としている。武田知己氏[4]は，重光の外務次官期から外相期までを考察しつつ，戦時期の重光の外交指導の様相を明らかにしている。しかし，重光の駐英大使期の外交的態度には，あまり言及していない。

本稿では，『重光葵関係文書』[5]中の未発表の史料「大使奏上草稿」[6]の紹介を中心に据え，昭和16年7月時点での重光の欧州情勢認識と天皇への上奏内容とを明らかにしたい。今回，分析対象とした「大使奏上草稿」は，衆議院憲政記念館の所蔵になるが昭和62年6月に発行した該館発行の『重光葵関係文書目録』には記載されておらず，それ以降，遺族より寄託されたものである。

2　外務省中枢を歴任

重光葵[7]が，東京帝国大学を卒業して外交官試験に合格したのは，明治44（1911）年である。同期生には芦田均，栗野昇太郎[8]等がいる。

昭和8（1933）年5月，重光は46歳で外務次官に就任し，約3年間その地位にあった。外務大臣は内田康哉だったが，4カ月で広田弘毅と交代した。この時期の外交は一般に広田外交と呼ばれているが，この広田外交を実質的に主導したのが重光次官であった。また在任中の昭和11年には2・26事件[9]が起こっている。

同年8月，彼は駐ソ大使に任命されモスクワに赴任したが，ソ連との外交交渉には頭を痛めた。特に昭和13年に起こった張鼓峰事件の処理には腐心したが，その直後の昭和13年9月，宇垣一成外相により駐英大使に起用され，10月ロンドンに赴任した。51歳で駐英大使となった重光は，松岡外相からの帰朝命令を受け取るまで

*兵庫教育大学第2部（社会系教育講座）
**兵庫県立伊丹高等学校

の2年半，その職務に没頭した。帰国後，半年を国内で過ごした重光は昭和17（1942）年1月，駐華大使として南京に着任した。前年の12月には重光が最も恐れていた米英蘭との戦争，いわゆる太平洋戦争が始まっていた。昭和18年4月，東条内閣の改造に伴い，重光は外務大臣に就任し，次の小磯内閣でも外相に留任して，戦時外交を指導した。終戦後の東久邇内閣で再び外相に就き，ミズーリ号艦上の降伏文書調印に日本側代表として出席した。

このように重光は昭和8年以降の戦前期，ほぼ一貫して外務省の中枢にあったといえる。

3　駐英大使期の意見書と彼の政策構想

重光は駐英大使時代，自らの意見を本省宛電報にしたためたが，それとは別に意見書も送付している。この時期の意見書は横35センチ，縦21センチの用紙（RONEO BOND の透かし入り）に謄写印刷されたものであり，大部な紙数となっている。表紙には「在欧一記者」の署名も見られる。また重光の原稿を3，4人の館員が分担し，手書きで清書したらしく所々で文字が変わっている。

重光の駐英大使期の意見書は筆者が調べたところ，外務省外交史料館に2冊，衆議院憲政記念館に4冊保管されている。外交史料館のものは，昭和14年8月1日付，「欧州政局」と題する意見書[10]（頁数，60頁）と昭和14年11月25日付，「欧州戦争ト世界」と題する意見書[11]（頁数，99頁）の2つである。

一方，衆議院憲政記念館のものは4冊あるので1つずつ紹介する。1つ目は昭和14年7月15日付，「東亜ニ於ケル平和機構」と題する意見書[12]（頁数，67頁）である。2つ目は昭和14年8月1日付，「欧州政局」と題する意見書[13]（頁数，76頁）である。この意見書は外交史料館のものと同一で重複しているが，付録として英文資料が60～76頁までついており，外交史料館所蔵の意見書より充実した内容となっている。3つ目は昭和15年8月15日付，「欧州戦争ト外交戦」と題する意見書[14]（頁数，64頁）である。4つ目は意見書の表紙が喪失しており，憲政記念館の保管封筒には「無題」[15]と表記されている。しかし，内容からみて昭和15年9月後半から10月頃の記述と考えられる。なお，『重光葵関係文書』中に残っている4冊の意見書には，重光自身が加筆・修正した跡が見られ，興味深い。

これら意見書の分析からは，当時の重光が「地域主義的世界観」を有していたことや英米によって資源（特に石油）を封鎖された場合には，日本が東南アジア地域（南北仏印）に石油等の代替資源を求めることは当然の権利であるとの主張を持っていたこと等が判明した。

なお，後に紹介する「大使奏上草稿」は，現在残っている駐英大使期の意見書の最後のもの（意見書「無題」）よりさらに8カ月後に執筆されており，興味深い史料といえる。

4　帰国旅程と草稿の執筆

昭和16年6月12日，重光は日本への帰国を前に英国首相チャーチルと会談を行ったが，その際チャーチルから「御帰朝の上は更に重要なる地位につかるるとの報道も耳にし居り御自愛を祈る」[16]と言われていることから重光が本国の日本で外相候補に上がっていたことがわかる。またこの会談でチャーチルは「貴下はシベリア経由で行かれる意向なりや，然らばそれは不可能なるべし」[17]と独ソ関係の切迫をほのめかした。重光は米国経由であると答え，その理由を尋ねたがチャーチルは多くを語らなかった。だが，その後の展開（6月22日，独ソ戦開始）からチャーチルの好意から出た発言であったとみることができよう。

重光がロンドンを出発したのは昭和16（1941）年6月16日である。飛行機でリスボンまで行き，そこで別便に乗り換えてニューヨークに向かうのだがニューヨーク便の予約に手間取り，数日をリスボン，マドリードで過ごしている。その際「リスボンは，今度の大戦では中立国であるから，街の様子は非常に明るかった」とし，さらに「今度の大戦には中立したため，マドリードは素晴らしく回復し，あらゆるものが良くなってゐた」[18]との感想を述べ，戦争に参加しない中立国ポルトガル，スペインの様子を伝えている。リスボンを出発したのは6月29日でニューヨークまで行き，ワシントンに立ち寄って再び飛行機でサンフランシスコに向かった。ここから日本までは船旅で，7月5日，日本郵船の鎌倉丸に乗り込み，7月20日，東京に到着している[19]。

後述する「大使奏上草稿」は，サンフランシスコから日本までの2週間余りの船旅の期間に書かれたもので，日本郵船用箋が使用されている。

帰国後の重光は7月23日，天皇に招かれて進講を行っている。その際，英国の時局の推移を述べた後，日本は「如何なる事があっても欧州戦争に介入してはならぬ。速に日本の国力を消耗する今日の政策は之を再検するの必要」があるとの自説を披瀝している。「御進講の内容に付ては賢〔畏〕くも天皇陛下より力強い御首肯が度々あった」[20]とし，進講の時間も2時間に及んだと記している。

次いで数日後には，皇后の招きにより1時間半余りの進講を行い，さらに高松宮や賀陽宮からも招待を受け，話をしている。また宮中において大本営連絡会議に出席し，近衛首相とは首相官邸で昼食を共にしながら充分，意見交換を行った。その他，陸海軍当局者と会談し，参謀本部では将校全員を前に講演を行っている[21]。このように帰国後の重光は精力的に動き，諸般の報告説明を

行っている。

ところで，帰国直後の重光は天皇・皇后へ進講を行っているが，その内容については重光の「手記」等から一部がわかる程度である。またその他の部面での講演内容も一部が紹介されているにすぎない。「大使奏上草稿」は，これらの内容を知る上でも極めて貴重な史料と言えよう。

5 「大使奏上草稿」の内容

「大使奏上草稿」は重光が駐英大使としての任を終え，帰国途上の鎌倉丸の船内（昭和16年7月5日～7月20日）で書き綴ったものである。該草稿は横18センチ，縦26センチの日本郵船用箋に書かれており，表題が2枚（同じ内容），目次1枚，本文30枚（通常の向きで使用・縦書き16枚，横長に用箋使用・縦書き14枚）で構成されている。それ以外に文脈の異なる草稿が2枚あり，計35枚からなっている。

表紙

奏上　欧州戦局ニ就テ

昭和16年7月　　日

在英特命全権大使　　重光葵

目次　欧州戦局ニ就テ

第1　戦争ノ経過

第2　英国ノ決心

第3　英米合体政策

第4　独蘇開戦ト其ノ将来

第5　戦争ノ今後

第6　日本ト戦争

第1「戦争ノ経過」部分は5枚，第2「英国の決心」部分は6枚，第3「英米合体政策」部分は5枚あり，いずれも通常の向きに縦書きされている。ところが，第4以降の草稿は時間をおいて書かれたものとみえ，用箋を横長に使用し，字体も微妙に変わっている。第4「独蘇開戦ト其ノ将来」部分は9枚，第5「戦争ノ今後」部分は5枚あるが，第6「日本ト戦争」部分は残っておらず，2週間余りの航海では草稿全体を書き上げることができなかったものと考えられる。

次に「謹ンデ欧州戦局ニ就テ奏上ス」で始まる「大使奏上草稿」の第3～第5を史料として掲げよう。なお，□□部分は草稿の判読不能箇所を示している。

第3　英米合体政策

1

仏国降伏当然英国ノ英独戦争遂行ノ決意ヲナスニ至ッタ有力ナル原因ハ米国ノ同情ナリ。「チャチル」ハ戦争ノ遂行ノ為メニハ米国ノ支援ノ絶対ニ必要ナルヲ痛感シ，「ルーズヴェルト」ハ英国ハ米国ノ前哨線ナルコトヲ明瞭ニ認識シ英国ノ没落ハ米国ヲ危殆ニ頻セシムルモノナルコトヲ信セル為メ，茲ニ「ルーズヴェルト」「チャチル」ノ連携ニヨル英米合体政策遂行セラルルニ至レリ。英米合体政策ハ英国ノ戦争遂行ノ決意ト米国ノ全幅的支援トガ車ノ両輪ノ作用ヲナシ，且ツ米国ノ支援ガ英国戦争遂行ノ推進力ヲナシ居レリ。

2

米国ニ於テハ孤立派又ハ「リンドバーグ」一派ノ意見ハ軽視シ得サルモ，第三期大統領選挙ヲ覇チ得，政□及世間ノ□□ヲ有スル「ルーズヴェルト」ノ政策ハ逆新スルコトナカルベシ。米国ハ参戦ノ責任ヲ負担スルガ如キ講和ヲ避ケツツ，実質的ニ益々英国ノ支援ニ進ミ，何時戦争ニ介入スルモ差支ナキ国内統一制ノ組織ニ進ミツツアリ。

3

米国ハ西半球ニ於ケル英国ノ領地ヲ軍事根拠地トシテ利用シ得ルニ至リタルノミナラズ大西洋ニ於ケル葡萄牙ソノ他ノ国ノ嶋嶼ニ軍事的利益ヲ表明シ，北ハ「グリンランド」ノ占領ニ次デ「アイスランド」ニ軍隊ヲ送リテ英国ニ対スル海上輸送路ノ安全ヲ期スルト共ニ何時ニテモ独逸トノ軍事的衝突ヲ覚悟スルニ至レリ。「アフリカ」西岸「ダカール」ニ特殊ノ関心ヲ払フモ同様ノ意図ニ基ク。米国ガ対英援助ニ深入スルニ従ッテ少ク共，当分ノ間太平洋ニ対スル関心ノ□リハ自重ノ勢ナリ。

第4　独蘇開戦ト其ノ将来

1

戦争当初独蘇間ニ不可侵条約締結セラレテ，蘇聯ハ中立ヲ維持シ独逸トハ独自ノ見地ニ立ツ并行政策ヲ実行セリ。此ノ并行政策ニ破綻ヲ来シタルハ如何ナル理由ニ基クヤ。戦争進行ト共ニ独逸ハ伊太利ノ地中海ニ於ケル地位ヲ救済スル為メニ巴爾幹ニ進出スルノ止ムヲ得サルニ至リ，巴爾幹及海峡ノ勢力ヲ是非共独伊ノ手ニ収ムルニ非ザレバ，対英全面的戦争ヲ有利ニ導クコト能ハサルニ立チ至レリ。大局ヨリ見レバ独逸ガ英国ヲ打倒スル為メニハ其ノ本国ヲ占領スルカ又ハ英帝国ノ植民〔地ノ急所ヲ衝クカ，若ハ二者共ニ之ヲ決行スルカノ外ヲ出デヌ〕[22]。

即チ彼〔筆者注：ヒトラー〕ハ対英戦争ノ大事業ノ途上，巴爾幹ニ於テ不可侵条約締結以来ノ態度ヲ精算シテ「マインカンプ」ニ復帰スルノ止ムヲ得サルニ立チ至レル次第ナリ。

2

英米合体政策ニ対抗スル為メニ独逸ハ東方ノ障碍ヲ除キ，大ナル背後ノ物資ヲ準備スルト共ニ西欧州ノ工業力ヲ動員シテ米国ノ対英援助ニ対抗セサルベカラサルニ至

レリ。然レドモ単ニ物質ノ確保ヲ目的トスルモノナルニ於テハ通商交渉ヲ以テ大体事足ル次第ナルニモ拘ラズ敢テ戦争ヲ起シタルハ前記ノ如キ理由ニ基クモノナリ。

3

元来，西ヲ守リ東ニ出ヅルハ「ナチ」本来ノ政策デアッテ，独蘇親善不可侵ハ権道ニ過ギザリシ次第ナルモ今日大戦争ノ最中，東方進出ニ転換スルノハ仮令其ノ必要ニ迫ラレタル理由アリトスルモ，其ノ実行ハ容易ノコトニ非ズ。独逸ガ「ジーグフリード」線ヲ英仏海峡ニ進メテ英国ノ大陸進出ヲ絶対的ニ防御スルノ用意ニ出デタルモ，之ガ為メナリ。此ノ政策ノ最モ忠実ナル信者タリシ「ヘス」ノ「スコットランド」飛行ハ「ヒットラ」ノ内命無カリシニシロ，恐ラク身ヲ挺シテ独逸ノ対蘇作戦ヲ擁護スルノ挙ニ出デタルモノト判断シ得ベシ。「ヘス」事件ニ関連シテ米国ニ於テ独逸ノ平和宣伝ガ行ハレ英米ノ反独気分ヲ緩和シ，戦争熱ヲ冷却セント試ミタル事ヨリモ観察シ得。

4

「スタリン」ハ形勢ノ只ナラザルヲ感得スルヤ急ニ日本ノ中立条約締結ノ提議ニ応ジテ背後ヲ堅メ，自ラ総理トシテ政府ノ陣頭ニ立チ「イラク」新政権ヲ承認シ，□□ト外交関係ヲ絶チタルガ頻リニ独逸トノ関係ヲ緩和センコトニ焦慮セリ。

然ルニ独逸ノ要求スル所ハ単ニ蘇聯ノ物資ニアラズシテ，蘇聯勢力ノ不存在ト云フコトナルヲ以テ「ヒットラ」ノ蘇聯処分ノ決意ハ強固ニシテ，一切交渉ヲ行フコトナシ。六月二十二日突然軍事行動ヲ起シ，蘇聯武力ノ紛砕ニ着手セリ。独逸ハ四週間ニシテ莫斯科ヲ奪ヒ，八月一杯ニテ欧露ヲ征服シテ「スタリン」政権ヲ転覆，未曾有ノ強大ナル陸軍タルコトヲ失ハズ。蘇軍多年ノ訓練ニ拘ラズ到底其ノ敵ニ非ザルベキハ既定ノ事実ト認メラル。然ルニモ拘ラズ果シテ蘇聯ノ処分ガ独逸ノ期待スルガ如ク，簡単ニ出来得ルヤ否ヤニ付テハ疑問ノ存スル所ナリ。或ハ第二ノ「ブレストリトウスク」条約ノ成立スルコトアランモ右ハ素ヨリ事件ノ終末ヲ意味セズ。或ハ懸ル今回ノ対蘇戦争ハ「ヒットラ」ノ力ニ依存スルコト餘リニ多キニ過ギタルヲ応スルニアラサルカヲ。要スルニ三年前ノ蘇聯ナラバ兎ニ角，今日ニ於テハ恐ラク武力ヲ以テ之ヲ解決スルコトハ困難ナルベシ。況ヤ蘇聯ノ国際的地位ハ開戦ト共ニ英米側ノ支援ヲ需ムル結果トナリ，従テ独逸ノ対蘇戦ハ益々戦局を複雑化スルモノト判断セサルヲ得サルベシ。

〔蘇聯ヲ打倒セル〕[23] 挙ヲ翻シテ英国上陸作戦ヲ敢行シ，茲ニ本年ヲ以テ戦争ヲ終末センコトヲ期スルモノノ如シ。今日（七月十五日）迄旅行中，得タル僅少ナル新聞報道ニ依レバ軍事行動ニ関スル限リ，蘇軍ノ抵抗強大ナルニ拘ラズ独軍ハ予定通リノ成果ヲ収メツツアルモノノ如シ。

5

独逸今日ノ陸軍武力ハ前世紀初頭「ナポレオン」ノ軍隊ニ優リ到底「カイザー」ノ軍隊ノ比ニアラズ，実ニ物心両方面ノ完備セル前古地ノ急所ヲ衝クカ若ハ二者共ニ之ヲ決行スルカノ外ヲ出デズ。英本国ノ占領ガ困難トナルニ従ッテ独逸ノ英植民地攻撃ハ益々必要トナルニ至レリ。此時ニ当リ蘇聯ガ独逸ノ希望スルガ如ク巴爾幹及海峡ニ対スル野心ヲ直接英国植民地ニ向ッテ□リ「アフガン」，印度若ハ「イラン」方面ヲ脅シ，独伊ガ地中海及「アラビア」方面及英本国ヲ攻撃スルニ対シテ（独逸ハ日本ガ「シンガポール」ヲ攻撃スルコトヲ希望ス）共同動作ヲトルカ，又ハ不即不離ノ中立政策ニ依ッテ尚引続キ海峡ニ野心ヲ抱キ巴爾幹ニ汎「スラブ」政策ヲ遂行スルカハ独伊ニトリ重要問題ナリ。一九四〇年十一月「モロトフ」伯林訪問ノ際ニ種々経済交渉ガ行ハレ，独蘇間ノ経済取極メハ円満ニ実行セラレタルモ，其ノ際独逸側ハ蘇聯ガ今後独逸ト并行政策ヲ取ルヤ否ヤヲ課題トシタモノノ如ク，之ニ対シテ「モロトフ」帰国後「スターリン」ハ之ニ対スル対償トシテ「ブルガリア」ニ於ケル軍事根拠地ノ占領（即チ同国占領）及海峡ニ於ケル基地二ケ所ノ獲得ヲ要求スルニ至レリ。（右ハ日本ガ不可侵条約締結ヲ提議シタ時ニ樺太南部ヤ千島ヲ要求シタノト同調ノ遣リ口ナリ）茲ニ於テ「ヒットラ」ハ政治上蘇聯トハ所詮，両立スルコト能ハズ，蘇聯ハ飽迄，独英ノ間ヲ縫ッテ戦争ヲ長引カシ世界赤化ノ端緒ヲ得ントスルモノナルコトヲ観取スルニ至レリ。

6

之ハ要スルニ独逸ノ本年ニ於ケル軍事行動ハ恐ラク対蘇戦争ニ終止〔始〕スベク対英全局ノ作戦ハ一九四二年ニ行ハルルモノト見ザルベカラズ。即チ独逸ハ伊太利ト共ニ本国ヨリ植民地ニ至ル英帝国ノ全面ニ亘リテ軍事行動ヲ起スノ地位ニ立チ，独逸ガ曩ニ蘇聯ニ期待セル英植民地ノ攻撃モ自ラ之ニ着手スルノ地位ニ立ツ訳ナリ。英国ハ此ノ形勢ニ応ズル為メニ既ニ「ワヴェル」将軍ヲ印度ニ移ス為ノ対策ニ出デタリ。

第5　戦争ノ今後

1

独伊対英米ノ闘争ノ今後ヲ考察スルニ戦争ハ機ニ依テ動キ，時ニ依テ決セラルルガ如シ。予メ其ノ結果ヲ断言スルコトハ憚ルベキモ，今次ノ戦争ガ本年中ニ直ニ片付クモノナルガ如キ簡単ノモノニアラサルハ之ヲ観過スベカラズ。今次ノ戦争ハ結局，武力ヲ中心トスル物心両面ノ全体的持久力ニ依ッテ決セラルベク，独逸ガ此ノ戦ヲ以テ独逸民族興亡ノ争ト見ルト同時ニ，英米ハ此ノ戦ヲ以テ「アングロサクソン」精神存亡ノ秋ト観ジテ居ラバ，其ノ争ハ寧ロ益々深刻トナリツツアリ。

2

陸軍ニ於テ独逸ノ強力ナルコトハ絶対的ニシテ，又海

軍ニ於テ英国ノ強力ナルコトモ明ニ之ト同様ナリ。空軍ニ於テハ独逸ノ実力ハ今日遙カニ優ル所ナルモ，英国ノ空軍モ長足ノ進歩ヲナシツツアリ，防御ニハ事欠カズ。米国ノ援助ヲ背景トシテ英本国ノ防御ハ堅キモノト見テ差支ナカラン。独逸ノ陸軍ノ行動スル所，即チ今後北阿ヨリ印度方面ニ至ル範囲ニ於テハ独逸ハ着々，功ヲ収ムベク「イベリア」半島モ勢ニ依ッテ動クコトアルベキモ（西班牙ハ大西班牙ヲ夢ミテ葡萄牙国境ニ兵ヲ集中シ居ル現状）決定的戦勝ヲ齎ス訳ニハ行カサルベシ。英国今日ノ詭弱点ハ海上連絡ノ成否如何ノ点ナリ。英国ガ果シテ「チャチル」ノ説明ガ如ク此ノ点ニ成功スルヤ否ヤガ今後，英米合体政策ノ程度ニ関係シテ大問題ナルモ，恐ラク米国ハ此ノ点ニ於テ徹底的ニ英国ヲ援助スルモノト見テ差支ナカルベシ。他方，独逸ガ力ヲ以テ占領地ヲ統治スルコトハ戦線拡大ト共ニ独逸ノ詭弱点ヲ構成スルモノト云フベシ。独逸ノ欠点ハ其ノ哲学乃至政策ト共ニ目的ノ為メニ手段ヲ選バズトノ主義ノ上ニ立チ居ル力（「カムフ」）ノ観念ヲ脱却スル能ハザル所ニアリ。従ッテ独逸ハ勝ツニ強ク負クルニ弱シ。此ノ点ハ「アングロサクソン」ハ正反対ナリ。此ノ防御ニ強キ英国ノ海ノ力ガ結局，持久戦ニ成功スルカ又ハ攻撃ニ強イ独逸ノ陸ノ力ガ優勝スルカハ，暫ク戦局ノ推移ヲ見ルノ要アルモ英国人ノ強固ナル堅忍性ハ見逃シ非サル所ナリ。

何レニシテモ此ノ戦争ハ欧州ヲシテ極端ニ疲弊セシムルト共ニ欧州ノ亜細亜，阿弗利加ニ於ケル植民地及半植民地ニ大ナル変化ヲ齎ラスモノト見ラル。

6 むすび

「大使奏上草稿」の第1「戦争ノ経過」では，昭和14（1939）年9月に始まった第2次世界大戦（欧州戦）の経過を重光は，以下のように分析している。すなわち，第1期は「『ポーランド』戦ニ初〔始〕マリ，『ポーランド』ノ所謂第四次分割ヨリ蘇聯ノ『バルト』進出及『フィンランド』戦ニ至リ，一九三九年冬期ニ及ブ東欧戦争」[24] までとし，第2期は「一九四〇年五月，独逸ノ諾威〔筆者注：ノルウェー〕侵入ヨリ仏国ノ降伏ニ至ル西欧戦争」[25] までを指す。第3期は「一九四〇年，地中海ヲ中心トスル北阿〔北アフリカ〕ヨリ次デ伊太利〔イタリア〕ノ希臘〔ギリシア〕攻撃ニ初〔始〕マリ，一九四一年五月伊太利敗戦ノ救助ヲ目的トスル独逸軍ノ巴爾幹〔バルカン〕ノ席捲ニ及ブ」[26] までとし，第4期は「一九四一年六月廿二日ヲ以テ開始セラレタル独逸ノ蘇聯大攻撃ニ初〔始〕マル」[27] 時期とする。このように重光は欧州戦の経過を前記の4つの時期に区分し，冷静な眼で情勢判断を行っている。この節の結びで，重光は英独間のこの戦争の結果が欧州だけでなく，今後の世界の形勢を相当長く左右するであろうと予測している。

第2「英国ノ決心」では，まず英国の危急に触れている。「仏国ノ降伏ハ英国ノ大陸ニ対スル防備ノ喪失ヲ意味シ，海峡ヲ隔テテ潮ノ如キ独逸ノ大軍ヲ防ギ得ルヤ否ヤハ何人モ疑ヒタル所」[28] であるとし，英国劣勢下の状況を伝えている。さらに「『チャチル』ノ指導ノ下ニ於ケル英国ハ英独戦争遂行ノ決心ヲ堅メ，飽ク迄英本国ノ死守ヲ誓フト共ニ，万一英本国ノ占領セラルル場合ハ政府ハ海軍ト共ニ一時，加奈陀ニ避難スル準備ニサヘ着手セリ」[29] と記されており，該草稿から英国政府がドイツによって占領される事態を想定してカナダへの緊急避難をも視野に入れていたことがわかり，興味深い内容となっている。またドイツの勝機について，もし「独逸軍ガ犠牲ヲ顧ミズ侵入スル時ハ到底，英海空軍ノ阻止約セザリシ状況」[30] であったと述べ，ドイツ軍の勝機はダンカークの勝利から間髪を入れず英本土急襲を行うにあったとの見方を披瀝している。

実際には2カ月の準備期間をおいて英本土へのドイツ軍の猛襲が始まっている。重光はこの時期の英国について「此危機ニ処シタル英国民ノ沈着ト意気トハ其ノ指導振リト相俟ッテ，歴史上稀ニ見ルノ偉観」[31] であると述べ，英国民の沈着冷静な態度と意思の強さに最大級の賛辞を送っている。

さらに英国の対独戦遂行の決意は強固であるとし，それは政府の構成と国民性の発露に起因しているとする。すなわち「政府構成ノ中心タル労働党ハ『ナチ』戦勝ノ下ニ於テハ只隷属アルノミ，今次ノ戦争ニ於テハ英国ノ勝利ニ依ッテノミ労働党ノ主張ヲ実現」できるとし，「保守党以上ノ国家主義ヲ発揮」[32] しているとみる。また同盟関係にあるカナダやオーストラリア等が英本国にまさるとも劣らない戦争遂行の決意を有していることは注目に値すると述べている。ドイツの無差別空襲については「英国民ノ反独感情ヲ高メ，一般国民ノ戦争決意ヲ強」[33] める結果となるのみと分析している。

第3「英米合体政策」では，米国大統領ルーズヴェルトと英国首相チャーチルとの連携によって英米合体政策が遂行され，英国の戦争遂行の決意と米国の全面的支援とがこの政策の両輪の作用をなしているとみる。さらに米国の支援が英国の戦争遂行の推進力をなしているとも付言している。米国については，ますます英国支援の体制を整えており，英国に対する海上輸送路の確保のためグリンランドやアイスランドに軍隊を派遣し，ドイツとの軍事的衝突も覚悟するに至った。したがって，当面，東アジア地域への米国の関心は薄らいだとの見方を示している。

第4「独蘇開戦ト其ノ将来」では，英本国への攻撃に手間取るドイツが次に狙うのは英国の植民地であるとする。さらにイタリアの地中海における地位を救済するため，ドイツはバルカン半島やその周辺部の海峡を独伊の勢力下に置こうと考える。そうなれば，ドイツとソ連と

の間で結ばれた不可侵条約は必然的に廃棄されることとなる。それが1941年6月22日のドイツ軍のソ連侵攻である。重光は「独逸ノ要求スル所ハ単ニ蘇聯ノ物資ニアラズシテ，蘇聯勢力ノ不存在ト云フコトナルヲ以テ『ヒットラ』ノ蘇聯処分ノ決意ハ強固ニシテ，一切交渉ヲ行フコトナシ」と述べ，6月22日の突然の軍事行動を「蘇聯武力ノ紛砕」[34] と冷静に分析している。その後，ドイツ軍は4週間でモスクワを占領したが，ソ連との戦いはドイツが期待するほど簡単ではないとみる。それは3年前とは異なり，ソ連は格段に国力を高めており，またドイツとの開戦によってソ連は英米からの支援を期待できる立場にもなったからである。この点から欧州戦はますます複雑化の様相を呈してきたとみる。ヒトラーの対ソ軍事行動には別の伏線もあった。それは1940年11月，ソ連のモロトフ外相がベルリンを訪問した直後，スターリン首相はソ連がドイツと并行政策を実行する代償としてブルガリアの占領等をドイツに要求したのである。その頃からヒトラーはソ連とは政治上両立できないと感じるようになった。

この独ソ戦の開始により，今年一杯ドイツは対ソ戦に追われ，英国との全局的戦争は翌年にずれこむとの見通しを示している。

第5「戦争ノ今後」では，独伊対英米戦争の今後の展開について解説している。ドイツは強力な陸軍を持ち，英国は強固な海軍を持つ。空軍は今日，トイツが優勢であるが，英国も飛躍的に進歩しており，自国の防衛には事欠かない。また米国の援助を背景とする英本国の防衛は固いとみる。そしてドイツは英国植民地への陸軍の攻勢を強めているが，決定的な勝利をえることはできないとする。

重光は両国の弱点についても論じている。英国の弱点は海上輸送路の確保の成否にあるとみているが，米国はこの点について英米合体政策からも徹底的に英国を援助するとの見通しを述べている。ドイツの弱点は，ドイツが占領地を力によって統治し，戦争範囲を拡大する点にあるとみる。さらに言えば，目的のためには手段を選ばずとの主義が弱点である。ドイツは攻撃には強いが防御には弱い。英国は防御には強く，ドイツとは正反対である。この防御に強く，海軍が優勢な英国が持久戦に持ちこみ勝利を収めるか，それとも攻撃面に優れ，陸軍が強いドイツが勝利を収めるかは今後しばらく戦局の推移をみる必要があるとする。ただし，重光が英国内でしばしば眼にした英国人の強固な堅忍性には注視する必要があるとも付言している。

そして，この欧州戦争が欧州の疲弊をもたらすとともに欧州諸国が保持しているアジア，アフリカの植民地，半植民地に大きな変化をあたえるであろうと予測している。

ところで，第4「独蘇開戦ト其ノ将来」部分と第5「戦争ノ今後」部分には，重光の草稿推敲の跡が数多く見られる。そこには赤ボールペンで追加・修正が入っている。例えば第5「戦争ノ今後」2の部分で英国，ドイツの弱点について修正前は以下のように綴られていた。「英国ハ米国ノ背景ヲ以テ飽ク迄，戦争ヲ続行スルデアラフ。ヨシンバ英本国ガ独逸ニ占領セラレテモ英側ハ戦争遂行スル決意ヲ持ッテ居ル位ダカラ，之ハ当然ノ結論デアル。英国ヲ屈服セシムルニハ如何ニシテモ英国ノ生命デアル海上線ヲ絶ツコトヲ要スル。即チ其ノ最モ優勢ト恃ム英海軍力ノ無力化デアル」[35] と英国の弱点をより具体的に指摘している。またドイツについては「独逸ヲ屈服セシムル為メニハ矢張リ其ノ依ッテ以テ立ッテ居ル所ノ陸軍武力ニ大打撃ヲ加フルノ外ハナイ。独逸ガ占領地ヲ拡大シテ被占領国民ノ怨恨ヲ買ッテ居ルコトハ戦線ノ拡大ト共ニ何ト云ッテモ独逸ノ詭弱点デアル。独逸ガ『ヒットラ』ノ考フルガ如ク『ヒットラ』ノ一代ニ何トカ大独逸ノ基礎ヲ堅メ得タトシテモ或ハ羅馬帝国ノ如ク又ハ神聖独逸帝国ノ如ク其ノ興リタルガ如ク又衰亡ノ時期モ案外早イカモ知レヌ」[36] とやはりより具体的に弱点を述べている。

ここで注目できるのは，ドイツの衰亡が案外早いかもしれないとの表現をあえて避けている点である。天皇への上奏ということを考慮した結果であろうか。

筆者は，重光葵の駐英大使時代の最終盤の時期に書かれた未発表史料「大使奏上草稿」を紹介し，昭和16年7月時点での重光の欧州情勢認識を明らかにした。特に昭和16年6月22日の独ソ戦の開始は，重光が帰国途上での出来事であり，該草稿はその時点での最新の情勢分析であったといえよう。また帰国直後の重光が行った天皇，皇后への上奏内容やその他の部面での講演内容を知る史料は限られており，この点からも貴重な史料といえる。

註

1）詳細については，小泉憲和『昭和戦前期，外務官僚の研究　－重光葵の政策構想と戦略性－』（兵庫教育大学大学院修士論文）を参照されたい。

2）酒井哲哉「『英米強調』と『日中提携』」『年報　近代日本研究』11，山川出版社，1989年。

3）田浦雅徳「昭和十年代外務省革新派の情勢認識と政策」『日本歴史』493号。

4）武田知己「重光葵の戦時外交認識と政治戦略」『年報　近代日本研究』20，山川出版社，1998年。

5）衆議院憲政記念館に遺族から史料約700点が寄託されている。これら史料を総括して『重光葵関係文書』と称せられている。該文書の史料的価値について，『重光葵手記』の編者である伊藤隆氏は次のよ

うに述べている。「これらの手記は，最初の『霧のろんどん』ではかなり立派なノートが用いられているが，だんだんにノートの紙質が悪くなっており，こうした点でもその時代の状況そのものを反映したものになっている。記述は概ね記述の対象となった時期に近い時に書かれており，日記という程ではないが，また回想録という程でもない。従って我々はこれを手記と呼んだ。もっとも若干後に書き加えられたのではないかと思われる部分もあり，又重光は時として同じ事柄を何回も書き直したようで（今回収録しなかったノートの中に，重複した，ほぼ同じ文章が見られる），その点は注意しなければならないが，全体としては概ね一次史料として扱ってよいと思われる」（『重光葵手記』解説，673頁）。

6）『重光葵関係文書』1B－111「大使奏上草稿」。該草稿は衆議院憲政記念館が昭和62年6月に発行した『重光葵関係文書』目録には記載されておらず，それ以降，遺族より寄託された追加史料の一部である。

7）重光葵の経歴については，重光葵『重光葵手記』中央公論社，1986年，中の年譜（693～697頁）と外務省編『日本外交年表竝主要文書』下，原書房，1966年を参考にした。

8）くりのしょうたろう，原籍・福岡県福岡市呉服町，明治44年7月東京帝国大学法科大学政治学科卒業，明治44年10月外交官・領事官試験に合格。栗野は重光と五高，東大，外務省入省のいずれもが同期である。重光の随想にも「記者（重光）ハ明治四十四年独逸法科ヲ卒業シテ外務省ニ試験ヲ受ケテ入ルコトガ出来タ。茲デ又，栗野君ト机ヲ並ブル様ニナッタノハ奇縁以上デアル」と栗野との密接な関係を綴っている（『重光葵関係文書』1B－54，随想「大川周明君ト栗野昇太郎君」）。なお，栗野の父親は駐仏大使も歴任した栗野慎一郎氏である。

9）2・26事件当日の様子を重光は帝国ホテル用箋2枚に綴っている。重光は事件前日から帝国ホテルに滞在していたことがわかり，興味深い。

「昭和十一年二月廿六日早朝六時頃デアッタ。ケタタマシク電話ガカカッテ岸秘書官カラノ知ラセダ。今朝五時前後，総理官邸ヘ数百ノ軍隊ガ襲撃シテ，今尚，之ヲ占領シテ居ッテ岡田総理ノ運命モ判ラヌトノコトダ。（中略）外ヲ見ルト二日前カラ降リ積ッタ雪ガ尺余ニモナッテ，一体静カナ庭ヲ越ヘテ銃剣ノ兵士ガ見エル。付近ニハ賀陽宮邸モ宮相ノ官邸モ隣接シテ居ル。自分等モ或ハ反乱者ノネラウ所カモ知レナイ。役所ニハ応電シテ概要ヲ知ラシメ，成ルベク事ヲ大ゲサニ取扱ハヌ様ニ処理セシメタ。秘書官等ハ出勤セヌ様ニト勧メタガ，『責任アル自分ノ行動ハ自分デ判断スルノ外ハナイ』ト云ッテ断ッタ」と綴っている（『重光葵関係文書』1B－110「2，26事件手記」）。

該手記からは，重光が自身も反乱軍の標的の1人にされている可能性に言及しており，事件直後の混乱ぶりとともに興味深い内容といえよう。

10）『外務省記録』松A 200X1「重光大使ノ欧州政局報告」昭和14年8月1日付，意見書「欧州政局」。

11）『外務省記録』A7008「第2次欧州大戦関係一件」昭和14年11月25日付，意見書「欧州戦争ト世界」。

12）『重光葵関係文書』1B－106，昭和14年7月15日付，意見書「東亜ニ於ケル平和機構」。

13）『重光葵関係文書』1B－106，昭和14年8月1日付，意見書「欧州政局」。該意見書には重光自身の校正が入っており，外交史料館に残る同じ意見書と比べ，より正確である。

14）『重光葵関係文書』1B－106，昭和15年8月15日付，意見書「欧州戦争ト外交戦」。

15）『重光葵関係文書』1B－106，意見書「無題」。該意見書中に「過去一年ノ戦績ニ依ッテ独逸ハ西欧大陸ヲ事実上席捲シタ」（第1章，3）とあることから，意見書の執筆は昭和15年9月後半から10月頃と考えられる。

16）重光葵『重光葵手記』中央公論社，1986年，259頁。

17）同上，262頁。

18）重光葵「倫敦より帰りて」『改造』昭和16年8月号時局版，227頁。

19）重光の帰国旅程については，『重光葵外交回想録』毎日新聞社，1978年，243～250頁を参考にした。

20）『続重光葵手記』中央公論社，1988年，106頁。

21）帰国直後の重光の活動については，『続重光葵手記』104～107頁を参考にした。なお，参謀本部での講演は「心ある将校には少なからず感銘を与へたが，爾来記者は英米派として悪宣伝をされ，憲兵の尾行も付くやうになった」と記している（重光葵『昭和の動乱』下巻，1952年，87～88頁）。

22）草稿では，「英国ノ植民」の後の文章が赤ボールペンで消され，この部分以降の文意がつながらなくなっている。そこで筆者が「手記」等を参考に補足した部分である。

23）草稿では「挙ヲ翻シテ」で始まっているので，文意がよくわからない。そこで筆者が補足した部分である。

24）前掲「大使奏上草稿」第1「戦争ノ経過」。

25）同上。

26）同上。

27）同上。

28）前掲「大使奏上草稿」第 2 「英国ノ決心」 1 。
29）同上。
30）同上。
31）同上。
32）前掲「大使奏上草稿」第 2 「英国ノ決心」 3 。
33）同上。
34）前掲「大使奏上草稿」第 4 「独蘇開戦ト其ノ将来」 4 。
35）前掲「大使奏上草稿」第 5 「戦争ノ今後」 4 部分で，重光が赤ボールペンで修正する前の草稿内容である。
36）同じく第 5 「戦争ノ今後」 4 部分で，修正前の草稿内容である。

The Views on the Europian Situation by Mamoru Shigemitsu, the Ambassador to Great Britain

Key words : Mr. Mamoru Shigemitsu the ambassador to Great Britain

Noriyuki FUJII*・Norikazu KOIZUMI**

Mamoru Shigemitsu who appointed ammbassador to Great Britain wrote 'the reports of rough draft' in the final stage of his ambassador's days.

We introduce his reports and clear his understandings of Europian situation in July, 1941.

Especially, the battle of Germany and the U.S.S.R. began on June 22, 1941 when Shigemitsu went home to Japan.

This paper analizes the latest situations as for the materials which know contents of 'express' and contents of a lecture on other department sides (the top to the Emperor and Empress whom Sigemitsu right after the return went for again.)